

国語科 学習指導案

1. 単元（題材）名 老子の理想とした社会を現代の社会と比較させて考えよう
(老子「無為之治」「小国寡民」) 使用図書は、教科書：『精選古典 B』(数研出版社)

2. 単元（題材）の目標（「古典探究」を想定）

- ・古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して、語感を磨き語彙を豊かにできる。(知識及び技能) (1) ア
- ・古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりできる。(思考力、判断力、表現力等) A読むこと (1) カ
- ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。(学びに向かう力、人間性等)

3. 教材観

教科書で取り上げられている教材のうち、老子の理想の政治、国家の良きあり方として「無為之治」「小国寡民」を取り上げる。いずれも複雑な訓点や句形はほとんど無く、学習者が比較的容易に読み下すことのできる教材である。「無為之治」ではワークシートを用い、荀子「性悪」との比較を通して、老子が説いた「欲をなくせば世の中が治まる」という主張を捉えさせたい。また、「小国寡民」は、「大衆衆民」の観点から本文を捉えなおし、当時の現実とは反対のことを老子が主張したことを押さえさせたい。

諸子百家は中国の春秋戦国時代にかけての歴史の大変動期、いわゆる戦乱期の中で、統制力を欠いた国家の統一をめざし、様々な思想を打ち出した。老子もその中の一人で、道家の祖と言われる人物である。道家は、金谷 (2012) で「儒家思想が政治権力者に認められた表向き of 正当的な思想である」とすると、この『老荘』のほうは裏街道を行く裏道の思想です。そのように儒家思想と道家思想は対照的に考えられます。」と述べられている通り、人の努力によって国家を統一するという考え方の儒家に対し、あるがままの本来の自然な人間に立ち返ることで国家が安寧になるという裏面を支える思想であった。

老子の生涯は不明な点が多い。しかし、思想は明確である。老子の主張の中核は、金谷 (1997) が述べている通り、「文化を作りあげておし進める人間の知識と欲望に対して、老子は強く反発する。『無知無欲』であれ、『無為』であれと、老子は主張する。自然に帰って本来の自己を発見せよというのである。」という、「無為自然」にある。老子は、万物の根源である「道」に従う「無為自然」の生き方が理想だと主張したが、これは、今を生きる学習者たちに対して、人間がいかにして生きていくかという問いを投げかけている。この問いに関して、現代の競争社会について書かれている『はずれ者が進化をつくる』の一節を読み、学習した老子の考え方をういて続きを書くという活動を行う。本書籍は、唯一無二の生命をつなぐために生き物たちがとった“オンリーワン”の生存戦略について述べられたものである。授業では一節を取り上げ、自然界と人間界の競争社会の在り方の違いから、人間界では競争社会からは逃れることはできないという筆者の主張を捉えさせる。競争は人と人が共に生きていく世界で必然的に起こってしまうものである。老子が生きた時代のように行き過ぎた競争は、戦争を勃発させてしまう。現代の日本では、戦争にまでは至らず、敗れても生命を落とさず、日々競争は起こっている。例として、社会の企業同士の争いや学生たちが経験する受験が挙げられるであろう。彼らが与えられたフィールドで他者と競争する様子はしばしば「生き残り」「戦争」と表現され、他者に勝ちたい、他者より上のランクをめざしたいという欲につながってしまう。このようなことを明らかにしたうえで改めて老子の思想を考える。これにより、競争社会のまさに逆である「無為自然」を唱えた老子の考えを用いて、この社会をどう生きることをめざすか、あるいはどのような社会を理想とするのかを考えさせ、老子の思想に対する理解を深めさせたい。

学習者たちを含め、人間もまた大自然の中の一存在である。老子の理想とした社会を捉えることで、これからの変動する社会をどう生きるか、学習者たちが考えることができるであろう。古代中国の思想を読み、先人のものの見方、感じ方、考え方に触れ、関わる中で学習者自身がものの見方、感じ方、考え方を豊かにすることができる教材である。

参考文献

金谷治 (1997) 『老子 無知無欲のすすめ』(講談社学術文庫) 講談社

金谷治 (2012) 『あるがままの生き方のススメ 老荘思想が良くわかる本』(新人物文庫) 角川書店

4. 生徒観

(省略)

5. 指導観

学習者たちはこれまで、第1学年、第2学年で『論語』を学習している。しかし、本文の内容の学習が中心であったため、古代中国の思想の内容について、詳細は本単元で初めて学習する。本教材の前には『孟子』『性善』『荀子』『性悪』を学習しており、儒家の思想には触れている。

本教材では、直前で学習している荀子「性悪」における治との比較をきっかけに、「無為之治」では老子が、人が欲を持つと世の中が乱れてしまうため、無為を唱えたことを、「小国寡民」では、老子が当時の現実（「大国衆民」）の反対の状態を理想としたことを捉えさせたい。それらを基に第3時では、現代の競争社会に関する文章の続きを老子の考え方をを用いてまとめさせることで、老子の思想を押さえさせたい。

6. 単元（題材）の評価規準

知識・技能【a】	思考・判断・表現【b】	主体的に学習に取り組む態度【c】
古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して、語感を磨き語彙を豊かにしている。	「読むこと」において、古典の作品や文章などに表れているものの見方、感じ方、考え方を踏まえ、人間、社会、自然などに対する自分の考えを広げたり深めたりしている。	老子の思想と現代社会の比較を通して、進んで語感を磨き語彙を豊かにし、今までの学習を生かして現代社会に対して自分の考えを広げ深めようとしている。

◎：総括的評価（記録に残す評価）

○：形成的評価（指導に生かす評価）

7. 単元の指導と評価の計画（全3時間）

時	学習内容	評価の観点			主な評価規準 (評価方法)
		a	b	c	
第1時	老子「無為之治」を読み、前時の荀子「性悪」から読み取れる治との比較を通して、争いのない世界をめざすための老子の主張を捉えさせる。	○	○		[a・b] 荀子「性悪」との比較から、老子の主張を捉えられている。(観察)
第2時	「小国寡民」を読み、老子が説いた理想郷が当時の現実（「大国衆民」）の批判につながることを示す。	○			[a] 老子の理想郷が当時の現実批判であることを捉えられている。(観察)
第3時 (本時)	第1時で配布した「無為之治」のワークシートと、第2時で配布した「小国寡民」のワークシートを用いてこれまでの内容を復習すると同時に、人に欲を持たせないという考え方や、文明の発達を批判した老子の「無為自然」の考え方の特徴を改めて捉えさせる。現代社会の課題についての文章を読み、その文章の続きを老子の考え方をを用いながらまとめる。			◎ ◎	[b・c] 稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる』（ちくまプリマー新書）の一節を読み、その続きを老子の考えを用いてまとめられている。(ワークシート)

※「知識・技能」の総括的評価は、定期考査で行う。

8. 本時の展開

(1) 本時の目標

既習の二つの章から、改めて老子の「無為自然」の考え方を捉えなおし、その考え方に基ついで稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる』（ちくまプリマー新書）の一節の続きを書く。

(2) 本時の評価規準

稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる』（ちくまプリマー新書）の一節を読み、その続きを老子の考えを用いてまとめられている。

(3) 本時の準備物

授業者：教科書、『はずれ者が進化をつくる』の一節と構想メモの欄があるワークシート3

学習者：教科書、ノート、筆記用具、第1時で配布した「無為之治」のワークシート1、第2時で配布した「小国寡民」のワークシート2、Chromebook

(4) 本時の学習過程

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入 10分	始業前に、6～7人のグループを作っておく。 「無為之治」のワークシート1, 「小国寡民」のワークシート2を用い、既習の二章から、「人が欲を持たなければ世の中が治まる」ことと「文明の発達があれば世の中が治まる」ことに改めて気づく。そのうえで、老子の唱えた「無為自然」について考える。	教員の一方的な解説ではなく、指名しながら進める。ワークシートに沿って進め、適宜補足説明を加える。	
展開 34分	ワークシート3の本文を読んで、その内容を理解し、競争社会の問題点をそれぞれが明らかにする。そのうえで、この社会をどのように生きることをめざすのか、あるいはどのような社会を理想とするのかについてグループで話し合う。(10分) 指名されたグループは話し合った内容を簡潔に発表する。(4分) 話し合った意見を基に、個人の意見をまとめる。(5分) 出てきたアイデアなど、ワークシートのメモ欄を用いて構想メモを書いてから、本文の続きをChromebookを使って作成する。(15分)	ワークシート3を配布し、『はずれ者が進化をつくる』の一節の内容(人間界ではオンリーワンであっても競争から逃れることができないこと)を理解させる。 文章として完全にまとまった形でなくても良いから思いついたことはワークシートのメモ欄に記入するよう指示をする。 机間指導を行い、話し合い活動が活発なグループに発表させる。 構想メモを書いてからChromebookを使うよう指示をする。	
まとめ 1分		提出の指示をする。	[b・c] 老子の考えに基づいて文章の続きを書いているか。(本文の続きを書いたデータ)

「観点別評価の判断基準」の設定

判断基準 評価規準	A 十分満足できる	B おおむね満足できる	C 指導の手立て
	[b・c]	この社会をどのように生きることをめざすのか、あるいはどのような社会を理想とするのかについて書く際、老子の思想に基づき、論の展開を工夫し、その課題や意見をまとめるとともに、課題を解決する方法を具体的に考えている。	この社会をどのように生きることをめざすのか、あるいはどのような社会を理想とするのかについて書く際、老子の思想に基づき、論の展開を工夫し、その課題や意見をまとめている。

